

## (二) 発心

交通事故の後遺症が神仏の加持力によって救われた私は、神仏の存在と、そのお慈悲と、迷いを断ち切るお智恵などを、身をもって知ることが出来ました。

この世の中には、神仏の存在を知らずに迷い苦しんでいる人が多くある。迷うが故に道をはずれて自他を苦しめているのである。この迷いによる原因と、その結果である苦しみを消除し、心身の安樂を与えてくれる神仏に私は、心の底より信服していきました。

### 発心の波紋

私は父に仏道に入門して、修学したい旨を伝えて許しを乞いました。父は「僧の修行は

厳しく並大抵<sup>なまたいで</sup>の努力では一人前になれない、中途で挫折すれば世の笑われものになるから、やめておくがよい」と一言のもとに反対されてしまいました。しかし私の仏道を求める心はより激しくなりまして、三日後再度許しを願つたのです。

その時父は『我が家は先祖代々浄土真宗の教えを信じ、先祖が十数代も浄土真宗の寺で住職をした念佛の固まりの家柄である。浄土真宗の教えを学ぶなら許す。自力修行の聖道門は、御開山親鸞上人が難行苦行の末にお捨てになつた道である。吾が第二人迄が自力修行の禅道に入門して、修学に励んだが、一人は大学半ばにして病死し、もう一人の弟は大学を卒業して修行中に妻帯したために、一等格の寺に入る事が出来ず、貧寺に入り月給取りして生活をささえている現状である。労多くして功少ないこの事実はご先祖のみ心にそわぬと思う。わしは、お前にそんな苦勞はさせたくない』と厳しく言い切つたのです。無言で頭をさげて父の前を去つた私は數日間よく考えました。心底よりも上がる求道心は、おさえればおさえる程、燃え上り誰が何と言おうとも、私は、仏道の修行をやろう、たとえ水の中、火の中でも道を求めるためなら突進しよう。仏法の教主、釈尊も親や周囲の

反対を乗り越えて難行苦行の道に入り給うた。弘法大師空海上人も師や周囲の反対を乗りこえて道をお開きになられた。釈尊や空海大師と比すべきではない事は、十分わかつてゐるが、ただあとを慕うて修学したい、と思いつめていました。

不退転の心で三度父の許しを願つたのです。父は「何度言つたらわかるのか、自力聖道門は殊の外厳しい。弟桃禅が朝麦の粥をすすり、雪の道を足袋もはかず草鞋で托鉢していいた事や、寒中火の氣のない本堂板間で大接心の禅行を長日続けた話を聞いただけでも涙が出る。真宗の道を学べば、他力本願で難行苦行はない、らくに坊さんになれるこの道なら許す。」と父の目には涙がたまつていました。私はこの慈父に、逆らいの言葉を吐いてしまつたのです。

「お父さんは、私をあわれみ、心配して反対されます事はよくわかりました。しかし淨土真宗は、死後の極楽行きを説き、現世利益は、邪道、迷信としてこれをしりぞけています。死後極楽世界に往生する教えも大変有難い教えであります、現世のなやみや苦しみを救済し、死後の後生も極楽に導き救うと誓つていられる弘法大師の御教えは、私には最

高に有難いのです。私は医師の薬や、針灸、電気治療でなおらぬ病気を弘法大師、不動尊に助けて頂いた事はお父さんもよくご存じの筈です。私は叔父の求めた禪道ではなく、ご縁ある密教に進みたいと思います。どうかお許し下さい。」ときっぱりと言つてしましました。

父は「それ程迄も親の言う事を聞かぬ者には援助はしない。勝手にせよ。勘当だぞ！」と冷厳に言つて座を立つてしましました。

## 家出

事前に覺悟の出来ている私は、父のこの言葉に少しの迷いも起こりませんでした。家出の用意が出来ている私は小さな風呂敷包一つ持つて父母への挨拶も頭を下げた程度で、細い田舎道を西の方の駅に向かって出発しました。東一宮線（今はありません）元小山駅が

目前に見えた時各駅停車の電車が通過して次は急行です。その次まで約一時間待たねばなりません。無人の停車場の板の腰掛けに腰をおろし、目をつむり、今後の行動について考え乍ら時間待ちしていました。

ふと気がつくと、いつの間に来たのか母がすぐ右側にいました。私は「ああお母さん」と呼ぶと「忘れ物があつたから持ってきたよ、中に弁当が一回分入っているから食べよ」「お母さん有難う」と私は母の顔を見乍ら言つたのです。すると母は「勘当した限り母を呼んで甘えてはなりません。お前は自分の目標を立ててているから、苦しくないかも知れないが、この母はお祭りが来ても正月が来ても、心にお祭りや正月の楽しさはない、天気が晴れても、わしの心はいつも曇り雨が降っていると思っておくれ、二度と会えないかも知れないが、お前が一心に仏道を修行して成就したならば、草葉の蔭から喜ぶと思ってくれよ、体を大切にしてな。」母の顔には涙が流れていました。「命がけで頑張ります」と私は誓いました。

間もなく電車が来ました。母の手を取って「行ってきます。お母さんも身体を大切にし

てね」と別れを告げました。

## 門前払い

目ざす寺に着き、ご住職に今日より弟子にして下さいと、手をついてお願ひをしました  
処、住職さんは「お前は親の反対を押し切って来たのだろう。親が反対する子は弟子には  
出来ぬ。さっさと帰れ。寺の内にはいるな！」と強い叱責であります。仕方なく玄関先の  
石に腰をかけて弟子の許しが出る迄ここで待つ決心をしました。

心に南無大聖不動明王、わが願いを成就せしめ給えと念じ続けました。つぎつぎにご祈  
禱に参る人々は、私を無視した如く通りぬけて、お加持を受けて帰つて行きました。

夕やみせまり、空腹と寒さに、母からもらつた弁当を開きました。大きなニギリめしが  
三つ入っています。梅干の中に入れてあるしそがご飯にまじり、塩と酸味でおいしい一口

めをかぶった時、梅干ならぬ咬み切れない紙が出てきました。薄暗い電気の光で見ると拾円札が丸めています。

現在の十円なら子供も喜ばぬ金額ですが、その当時は饅頭が一銭で買った時代ですから金の価値があります。私は母の恩愛に泣きながら一個、三個とニギリめしを食べました。どのニギリめしにも、拾円札が入っていました。

お母さん有難う、この金はいいよい困った時に使わせてもらいますと、押し頂き、腰に吊つた革のお守り袋に一枚をいれ二枚は財布に入れて腹巻にしまいました。

午後八時頃、寺の住職さんは玄関に施錠して、奥の部屋に行ってしまわれました。二月下旬の夜空は晴れて星がきらめき、寒さは増してきます。母が持つて来てくれた風呂敷包には毛糸のシャツが入っていました。それを重ね着して、心経をとなえながら朝を待ちました。